

道公立学校校務支援システムの運用状況へ上

校務の効率化や教職員の事務負担を大幅に軽減することも、子どもを教職員全体で見守るきめ細やかな指導の充実を図ることを目的に、本年度から運用を開始した「北海道公立学校校務支援システム」。道教委では、各学校からの要望等を踏まえ、様々な機能を追加することも、より使いやすいシステムとなるよう機能の改修を進めている。各学校では、道教委が作成したマニュアルなどを活用しながら積極的な運用に努めている。今回、大規模校の千歳高校、総合学科の清水高校、小規模校の浜頓別高校において、その運用状況などを取材した。連載で紹介する。

千歳高校（釣崎彦校長）では、校務支援システムを有効に活用するために、ホームページやICT機器、校内システムなどの管理を担当してきた「情報グループ」主導で、校内説明会を全体で三回、各分掌で三〜四回開いて教職員の共通理解を深めてきた。

新たな機能が追加されるたびに、更新内容を確認。機能の把握に努め、各教職員に周知を促すとともに研修を実施してきた。

導入の成果として、教科担当者が入力したデータ

3学年担任の負担軽減 情報グループ主導で千歳高校 教職員の共通理解図り推進

が、調査書や指導要録などの作成に反映され、第三学年担任の負担軽減につながったことや、生徒の出席データをはじめとする調査結果の集約に、グループウェアを活用したことで作業時間の短縮が見込まれたこと、閲覧したい情報を容易に引き出せることなどを挙げた。

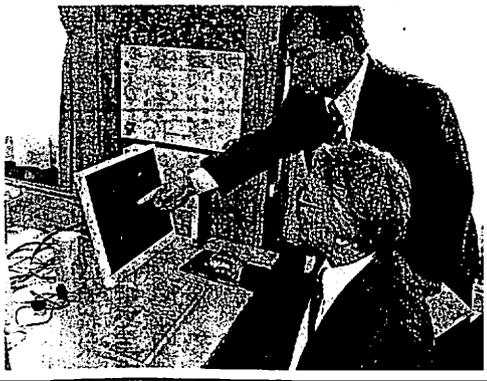
一方、課題や要望として、①入力ミスにシステム側でチェックする体制の整備の時間割変更に伴う出入力などに対応したシステムの改善の学校現場の意見

が、調査書や指導要録などの作成に反映され、第三学年担任の負担軽減につながったことや、生徒の出席データをはじめとする調査結果の集約に、グループウェアを活用したことで作業時間の短縮が見込まれたこと、閲覧したい情報を容易に引き出せることなどを挙げた。

一方、課題や要望として、①入力ミスにシステム側でチェックする体制の整備の時間割変更に伴う出入力などに対応したシステムの改善の学校現場の意見

現場で戸惑いや疑問の声がいくつかみられたものの、道教委が現場の要望を吸い上げて、改良していただいていたおかげで、わずか一年の間で使いやすいはなった」と話す。

また、「人事異動があっても同様のシステムで業務を行うことができるのは大きな強み。様々な機能を進んで使わないと、いつまでも分からない。多少の苦労は覚悟してでも運用を図るべき」とシステム導入校へアドバイスを送る。



「情報グループ」の校務支援システムを担当する岩澤雅人教諭は「導入当初は乗り切れるポイントの一つとし、そのような人材の配置や育成など体制の整備が重要」と強調。「校務支援システムの運用はまだまだ緒に就いたばかり。各学校が継続して活用し現場の声を伝えることで、ますます使いやすいシステムになるだろう」と期待している。

道公立学校校務支援システムの運用状況〈中〉

【種内苑】浜頓別高校(田村一郎校長)では、校内研修などで独自に作成したマニュアルを活用して、出席の入力方法、成績に関する入力方法など順を追って理解を深めながら運用を進めることで、学校全体でその効果を実感している。

校務支援システムが本年度から全面実施になることから、従来の成績処理システムと併用して運用している学校もある中、同校では校務支援システムのみを使用していくことを全教職員で確認。教務部長の竹之内香奈絵教諭が入力方法や使用方法に関するマニュアルを作成し、実際のパソコン

メリット計り知れない
独自にマニュアル作成—浜頓別高
問題はヘルプデスクが解消

上の画面を指し示しながらはじめる。メリットは計り知れないものがある」と効果を実感。中でも大きいのが出欠管理と成績処理。また、運用していく上で、手助けとなったのがヘルプデスクとのやりとり。

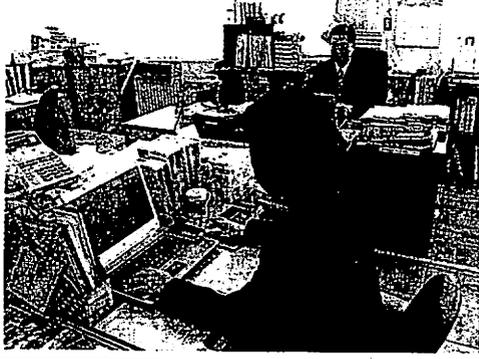
「疑問にもすぐに丁寧で親切に教えてくれ、お世話になって回らなければならなかったばかりだった」と話した成績が、指導要録、調査書にも反映され、それまで作成し何段階の手順を踏まなければならなかったのが省略できた」と話す。

田邊康弘教頭は入学時に送られてくる調査書について、「例えば八十人生徒がいたとすると、八十枚の調査書から内申点の計算に間

違いがないかなどを確認するのに大抵な時間を割いていたが、その作業の手間が大幅に省け、紙を使う必要もなくなる」と述べ、その効果を強調する。

また、現在二間口という小規模校において、も「小さいからといって、仕事量が少ないというわけではなく、むしろ小さい学校ほどシステムの恩恵を受けることができるのでは」と話す。教員が少ない学校では、「教務や総務など複数の仕事をかけもちすることも多く、システム運用にかかわる時間のさらなる確保を目指す。

運用から一年が経過。日々の作業にも慣れ、膨大な事務作業の軽減につなが



「ヘルプデスクの担当者がシステムに入り、その誤りを直してくれ」田邊康弘教頭は入学時に送られてくる調査書について、「例えば八十人生徒がいたとすると、八十枚の調査書から内申点の計算に間違ったところと、八十枚の調査書から内申点の計算に間違いがないかなどを確認するのに大抵な時間を割いていたが、その作業の手間が大幅に省け、紙を使う必要もなくなる」と述べ、その効果を強調する。

道公立学校校務支援システムの運用状況

【帯広発】平成九年、本道で初めて総合学科を導入した清水高校（北村善春校長）。総合学科高校のパイオニアとして、総合学科を導入する各学校の道標となり、全道各地では、同校の取組を参考とした教育活動が展開され、今後も本道の総合学科高校の中心的な役割を果たしていくことが期待されている。

同校では、校務支援システムを積極的に活用するための取組として、教務支援システム校内推進委員会を組織。基本的な機能を確保するとともに、将来的に業

成績処理時の業務軽減

道内で初めて総合学科導入一清水高 システムに合わせ校内体制整備

務軽減につながるシステムであることの共通理解を図っている。

年度始めに、システムの利用に向けた研修会を実施。システムを活用する中で出てきた課題・疑問点を踏まえ、改善してほしい機能について、学校全体の要望として道教委に具体性を

もって伝え、管理職の強力なリーダーシップのもと、システム担当者に任せきり

にせず、よりよい活用や改善に向けて具体的な取組を行うことで、教職員の理解が得られている。

また、独自の『教務支援システム通信』や『教務支援システム成績処理マニュアル』を発行するなどし

て、きめ細かな情報発信を行っている。

システムを活用した成果として、出欠管理では、当初は使い方が分からない不便なものとして考えられていたが、慣れることで日々

の作業として日常化してくと「毎日の入力に慣れれば、これまでのシステムより、これまでのシステムより

なったほか、これまででは成績処理時にまとめて入力していたため、成績処理時の業務軽減が図られた。

成績管理はこれまで職員室とは別室で行い、パソコンの数が限られていたが、システムを活用することで各自のデスクで実施。教職員の負担が軽減されている。

同校では、今後のシステムの大切な一人ひとりがミスがないかチェックする意識や責任をもつことが必要」と話している。

同校では、今後のシステムの大切な一人ひとりがミスがないかチェックする意識や責任をもつことが必要」と話している。

同校では、今後のシステムの大切な一人ひとりがミスがないかチェックする意識や責任をもつことが必要」と話している。

同校では、今後のシステムの大切な一人ひとりがミスがないかチェックする意識や責任をもつことが必要」と話している。

同校では、今後のシステムの大切な一人ひとりがミスがないかチェックする意識や責任をもつことが必要」と話している。

同校では、今後のシステムの大切な一人ひとりがミスがないかチェックする意識や責任をもつことが必要」と話している。

同校では、今後のシステムの大切な一人ひとりがミスがないかチェックする意識や責任をもつことが必要」と話している。

同校では、今後のシステムの大切な一人ひとりがミスがないかチェックする意識や責任をもつことが必要」と話している。

